

国際社会で活躍できる児童生徒の育成

—— コロンボ日本人学校の実践 ——

前コロンボ日本人学校 教諭

山口県周南市立住吉中学校 教諭 藤井 信宏

キーワード：在外教育施設，コロンボ，国際社会，国際理解，英語教育

1. はじめに

コロンボ日本人学校の教育目標は、「自ら考え、心身ともにたくましく、国際社会で活躍できる児童・生徒の育成」である。学習指導要領に準じた教育課程を基礎としながらも、海外の特色やスリランカの学習資源を生かした取り組みをカリキュラムに組み入れることで日本人学校独自の特色を出し、教育課程を弾力的に編成している。

ここでは、「国際社会で活躍できる人物の育成」をテーマとした本校の授業実践を、「英語教育」「現地理解教育」「International Activity（以下、IAと略す）」の3つに分けて紹介したい。

2. 英語教育の充実

(1) 4技能のバランスのとれた英語指導

中学校の英語教員である自分にとって、在外教育施設の英語教育事情は最大の関心事であった。まず、コロンボ日本人学校の週あたりの授業時数は、以下の通りとなっている。

小1…26時間 小2…27時間 小3…28時間 小4～小6…29時間 中学部…29時間

この中で、ネイティブ講師によるオール・イングリッシュの英会話の授業が、小1から中学部までの全ての学年で週3時間確保されている。中学部では、その英会話の時間以外にも、学習指導要領に則って中学英語の授業が組まれている。

この時間数だけでも英語教育の充実ぶりがうかがえるが、コロンボ日本人学校では、毎日の6時間授業の後にコロンボタイムという特設タイムを設け、独自のカリキュラムを組んだ7時限目の授業を行っている。毎週火曜日の6時間目の後に行われるコロンボタイム・イングリッシュは、この取り組みの一環である。

この授業は、全児童生徒の英語の4技能のうち、主に「書く力」「読む力」を高めるため、習熟度及び発達段階別に分けた少人数グループを全教員が担当し、英語の指導に当たるといえるものである。この試みは、保護者の学校に対する英語教育への熱い要望が反映されたものであり、私の赴任2年目から始まったものである。

この学校に勤務する派遣教員の中で唯一の英語教員であった私は、2年目当初にこの新しいプロジェクトを立ち上げる担当を任された。当初は同僚の先生達に専門教科外の英語を教えてもらわなくてはならないこともあり、指導の際に共有できる膨大な量の教材データベース作成やグループ分けなどにずいぶん苦慮した。しかし、何事にも協力的で前向きな熱意のある同僚の先生たちに恵まれたお陰で、次第に軌道に乗り始め、今ではコロンボ日本人学校の特色ある取り組みの一つとなっている。

さらに、私が担当した中学部の英語の授業においても、中1の段階から徐々に2年生や3年生で学習する文法事項を取り入れていった。学年の履修範囲だけにとらわれず、生徒の学力の実態に応じた教科指導を心がけることによって、学習の停滞を防ぎ、より英語への意欲や関心を高めることができた。

このような英語学習の成果を試す場として、児童生徒には年3回の英検の受検を奨励してきた。その結果、赴任初年度はわずかに2名にしか満たなかった準2級以上の取得率は、最終年度末には、2級が3名（中学部5名中）、

準2級が6名（いずれも小学部児童）と、大幅に向上した。小学部6年生と中学部生徒のみに限って言えば、準2級以上の取得率は71%である。全校児童生徒数32名（H25年度末）中、低中学年児童数が半数を占める学年構成や、児童生徒の入れ替わりも多いことを考えると、一定期間以上本校で学習した児童生徒の英検取得率を飛躍的に向上させることができたといえる。

このように、英会話授業では主に「話す」「聞く」能力を高め、一方で全教員が協力し合いながら「書く」「読む」等の基礎的な力を養う時間を継続して確保することにより、4技能のバランスがとれた学習を行うことが可能になった。

(2) 小学校英語教育の大きな可能性

先に述べた英会話授業に、私も英語教員の立場から、ティーム・ティーチングで参加してきた。そして、その過程において、今までと違ったティーチング・メソッドを学べたことは大変価値あるものとなった。

英会話の授業がオール・イングリッシュであることは先に触れたが、その指導法は現地ネイティブ講師の長年の経験に基づいたものであり、ネイティブの目線からの指導であるという点で大きく説得力がある。子どもの活動を多く取り入れているため、子どもたちも楽しく学習に取り組むことができる。また、オール・イングリッシュで授業が進むため、最初は聞き慣れない単語が多くて戸惑う子どもたちもいるが、次第に慣れて、指示が感覚的に「理解できる」ようになってくる。

本校の英会話の授業は、「American English Today (Oxford University Press)」や「Side By Side (Longman)」など、英会話スクールがよく使用する英会話テキストブックとそのシラバスが利用されている。これらは語彙量も豊富であり、日常生活に密着した単語が効率よく学習できるという点で大変優れている。「単語力」は「表現力」に直結する重要なファクターでもあるため、学年や年齢の縛りにこだわらず、できるだけ多くの単語を日々繰り返し子どもたちに与え続けるべきである。インターナショナルの学校に3年間通った6才（最終年度当時）の私の長男が、難しい英単語を自然と習得していたことに私自身が驚かされた経験からも、英単語の習得は「使用頻度」や「学習生活環境」によるところが大きく、学習者よりもむしろ、与える側の授業者の工夫により改善されるものであると感じる。既習の一部の単語や文法事項だけを与えて表現活動を仕組む限界を感じていた自分にとって、子どもたちにたくさんの単語を「浴びせ」ながら「慣れ」させる指導は、今後の指導で子どもたちの表現力の幅を広げるための大きなヒントとなったことは間違いない。

また、小学校の英語教育がもたらすメリットについても触れておきたい。早期英語教育については賛否両論があるが、現在の方向性は、英語は小学校での必修化から、更には教科化に向かっている。基盤整備の問題は残されているが、各分野で国際化の波が押し寄せる現代社会の中で、将来日本が取り残されないためにも、着手しなければいけない必要な改革であると思われる。また、言語習得の「臨界期」が9～10歳と言われていることから、早期の英語教育はより効果的であると思われる。

「早期英語教育の導入によって母国語の発達が遅れる」という指摘をよく耳にするが、これはあくまで日常生活全てを英語で生活している環境レベルの子どもに一部当てはまる話ではあっても、一般論として強調するには説得力に乏しいものである。むしろ、母国語で成熟しきってしまった後に異言語を習得するのがいかに大変かということ私たちが多くの大人が身をもって経験してきたはずではないか。

実際、日本人学校に長年通いつつ、幼い頃から英語をずっと学習している児童たちも数多くいたが、その児童たちの多くは表現力も発想も大変優れており、英語の発音もネイティブレベルに近かった。小さい頃からの英語教育が、リスニング力や発音面において絶大な効果を発するものであることを、私は本校に勤務して、子どもの成長とともに肌で感じ取ることができた。子どもは、与えられた環境によってバランスよく育つものである。

2. 現地理解教育 ～与えられた環境を生かして～

コロナ日本人学校3年間の勤務の中で、現地校との交流をもつ機会が数多くあった。文化交流（交流会）が

年2回、サッカー交流が年3回、そしてJSCフェスティバルという学会への現地校招待も数に入れば、年間の交流は6回にのぼる。赴任1・2年目は、日本人学校と現地校の文化交流コーディネーターとして、3年目はサッカー交流の企画及び実施を担当した立場から、交流会を通じた現地理解教育についての考察を述べたい。

(1) 年に2回の文化交流会

まず、在外教育施設における国際理解教育は、次の2点で日本の学校のそれと比べて利点が多い。

1. 現地の生徒たちと直接触れ合う機会を多く得られる。
2. 現地語及び英語を用いる実践の場となる。

本校では、現地の生徒と直接関わるイベントを積極的に増やした。例年、年2回の文化交流会については、第1回は現地校アショカ・カレッジの子どもたちを日本人学校に招待して行い、第2回は相手校に出向いて行うことで、お互いに自国の文化や習慣を紹介し合う形をとっている。

スリランカには、「シンハラ語」「タミル語」という2種類の言語が存在しているが、英語を話せる人も多いため、交流会においても英語はやはり互いの共通言語として欠かせないものであった。「日本語」や「シンハラ語」は、片言でもお互いの心の距離を縮めるのに役立ったが、最終的なコミュニケーションツールとして英語が必要であることは疑いようもない事実であった。

こうした異文化交流の場は、普段から学んでいる英語の実践の場として大変貴重であり、子ども達自身もそのようにとらえていた。司会やプレゼンテーションはすべて日本語と英語を用いて行い、子どもたちの英語学習のモチベーション向上にもつながった。

(2) 学期に1回のサッカー交流

年間2回の文化交流会は、お互いの文化や習慣の理解には欠かせない重要なイベントであった。しかし、行事後の交流が途絶える期間が長く、せっかく行事で交流を深めても単発的なものに終わる傾向があった。

そこで、年間を通して継続しているサッカー指導を発展させ、サッカー交流を学期に1度行うことにした。現地校コーディネーターの先生が大変親日的で熱心な日本語学習者であったことも、交流機会の拡大を促進してくれる大きな一助となった。

文化交流だけでなく、スポーツ交流の機会を設けたことによる効果は大きかった。サッカーというスポーツをツールとして行う交流は、言葉の壁を越えて、子どもたちの交流をより深める機会となった。この交流試合は毎回保護者に公開して行い、運動で体を動かすのが好きな児童生徒たちのより一層のモチベーション向上にもつながった。文化や伝統といったデリケートな面をもつ分野の交流とは違い、サッカー交流で見せる子どもたちの顔は、普段の素の顔であり、実に楽しそうであった。そういった意味では、サッカー交流は「草の根交流」であり、まさにボール1個で皆の心をつなぐことができる、シンプルかつ効果的な交流方法であり、次年度以降も引き続き行われる見通しとなった。

現地校との交流は、海外の日本人学校の多くが実践していると思われるが、文化とスポーツの両面でのバランス良い交流を行うことも、子どもたちの幅広い興味関心に対応するために大切な視点であると考えている。今後の教育活動のあらゆる場で生かしてゆきたい。



日本人学校での交流会の様子

3. International Activity (IA) の取り組み

(1) 授業者の専門分野を生かした授業実践

毎週木曜日の7時限目は、「IA」と題した本校ならではのユニークな全校児童生徒一斉授業を行う。この授業は、「国際社会で活躍する人物の育成」というテーマのもと、全教員が輪番制で行う。

多くの分野で国際化が進んでいる現代社会では、本テーマの解釈も広義的にとらえることができるため、授業者はそれぞれ独自の解釈でテーマに迫り、国際社会で活躍するために必要な知識や技能、体験を取り入れた授業を提案する。

「生け花」「落語」などの日本文化からテーマに迫る者、「哲学」「道徳」などの思想分野からテーマを考える者、「サッカー」などスポーツを通して現地校との交流を図る者、「世界遺産」「環境問題」を扱う者、「シンハラ語（現地語）」に焦点を当てて現地理解を促す者など、多岐にわたる授業実践は子どもたちにとっても大変有意義で、皆毎回とても楽しみにしている授業の一つであった。

また、この授業は全て保護者にも公開され、教職員の研修の一環という位置づけとされている。

(2) 海外ならではの環境を生かして

「国際社会で活躍する人物」というテーマで授業構成を考えたとき、海外に住んでいるメリットを生かそうと、実際に様々な分野の最前線で活躍しておられる方々にゲストティーチャーとして来て頂くこともあった。

私自身、こちらで培った人脈を生かし、多くのゲストティーチャーを招いて授業を行ってきた。「平和」をテーマにスリランカの内戦を扱った授業では、内戦後の復興支援をしておられるJICA（国際協力機構）の職員を招いたり、「コミュニケーション力」をテーマにした授業では、JETRO（日本貿易振興機構）の方を招いてチーム・ティーチングで授業を展開したりした。いずれも、打ち合わせを重ね、意見交換をする中で、私自身が異業種の方々から学ぶところも多く、自身の修養にもつながったと感じている。こうした方々との親交は、授業をきっかけにその後も続き、大きな財産となっている。



IA（公開授業）の授業風景

4. おわりに

私たちは、一歩国外に出て「日本人」として見られたとき、あるいは異なる文化や習慣、人種の中にどっぷりと浸かったとき、自分が日本人であることを強烈に自覚する。

国と国の違いという壁、言葉の壁、考え方の違いという壁…。

住人たちの言葉も肌の色も違うこの町を歩く度、自分が外国人であることを最初は強く認識させられたものである。しかし、3年という任期を終える頃、私は自分がこの町の一部になっているように感じていた。3年間の海外生活は、自分の中の壁が徐々に崩れていった貴重な3年間であったのかもしれない。

在外教育施設での勤務は、よき環境と職場の仲間にも恵まれ、充実したものとなった。特に、本校の教育実践のキーワードであった「国際社会で活躍できる人物の育成」については、これからも継続して念頭に置いて実践を行いたい。そして、授業等において生徒達に熱く語れる教師であるとともに、さらなる自身の修養と研修にも努めていきたい。